

## 新山優子：第 18 回国際藍藻研究会シンポジウム参加記

今年 8 月 16 日から 20 日にチェコ共和国で開催された第 18 回国際藍藻研究会シンポジウム (18<sup>th</sup> Symposium of the International Association for Cyanophyte Research, 以下では IAC と略記) に参加しました。その様子を簡単に報告します。

IAC は日本藻類学会員にはあまり馴染みのないものだと思いますが、その歴史は 1959 年に遡ります。1959 年夏に開催された第 14 回国際陸水学会に参加した藻類研究者達の小グループが、藍藻類の生態および分類に関し各国の研究者が協調して取り組む必要性を論じ、その翌年に第 1 回の IAC シンポジウムがスイスで開催されました。その後は主に欧州各国の研究者がホスト役を務めながら、1963 年の第 3 回以降は 3 年に 1 度開催され、現在に至っています。2004 年までの大会はすべて欧州内で開催されていますが、2007 年の第 17 回シンポジウムは初めて海を渡り、メキシコで開催されました。初期の 25 年間の IAC に関する歴史は、その間に開催された 9 回のシンポジウムでの発表や報告を含め、Kann & Golubic (1985) が詳しく記述しています。大会論文集は、初期には Schweizerische Zeitschrift für Hydrologie に、その後は Algological Studies, Archiv für Hydrobiologie Supplementband に掲載されてきました。今年の大会論文集は、チェコ版藻類学会誌といえる“Fottea”に掲載される予定です。

今年のシンポジウムの会場となったのは、České Budějovice (日本語読みではチェスケー・ブディエヨヴィツェ) にある南ボヘミア大学理学部でした。České Budějovice はプラハの南約 150km に位置する、南ボヘミア地方の中心都市です。プラハからは鉄道またはバスで 3 時間ほど要します。私は欧州の地を踏むのは 2 回目、チェコは初めて、一人旅も初めてです。国際学会での発表も初めての経験です。経験豊富な藻類学会員諸氏はお笑いかもしれませんが、IAC のホームページや 7 月にインターネット配信された「Conference Survival Guide」と首っ引きで、大会会場への到着に備えました。何とか無事に 15 日午後の受付に間に合い、ポスター発表を行ってきました。

参加者は約 100 名でしたが、日本からは私一人、他に東アジアからはタイ・チェンマイ大学の Yuwadee Peerapompisal 博士と院生が参加しただけでした。右の写真は大会最終日前夜の Farewell party 直前に、市の中心部にある Přemysla Otakara II 広場で撮影されたものです。シンポジウムは 16 日朝の J. Komárek 博士の講演を皮切りに、37 の口頭発表と 60 のポスター発表がエクスカッションをはさんで 4 日間に渡って開催されました。口頭発表の会場は 100 名ほどが座れる階段状の講義室が 1 室だけでした。左右の窓と天窓から自然光が差し込む中、各発表は PC を使用して暗幕なしで行われました。部屋が暗くないという状態は非常に良いと思いました。発表者だけでなく出席者全員の顔が良く見えるし、何よりも眠気に誘われないのです。ポスターは口頭発表会場のすぐ外にあるロビーや入口ホールに 2 日間ずつ張られました。ここは休憩会場でも

あり、さらに小パーティー会場ともなったので、定められたポスターセッション時以外にも、随時、質問や討論が行われていました。非常に嬉しい驚きだったのは、大会初日に誕生日を迎えた私に大会責任者の J. Kaštovský 博士が参加者全員の前で花束を渡してくれたことでした。このエピソードから伺えるように、全体を通じてこじんまりしたアットホームなシンポジウムだったと言えます。

初日午後の後半に、Komárek 博士を囲んでの自由討議が行われました。ここで議論が白熱したのは、藍藻は原核生物であるが故に細菌の命名規約に従うべきではないか、いや、従来通り植物命名規約に則るべきだ、という 2 つの見解を巡ってのものでした。時間を延長して討議されましたが、結局結論は出ませんでした。また、新発見などが加わることによって属名や種名が変わる一方、誤同定された株が世界中で使用され、そのような株を使用した論文が次々に引用され、もはや訂正しようがないことなども指摘されました。

Komárek 博士ともお話したのですが、世界中で同類の研究を行っている研究者らがほぼ同じ頃に同じような問題意識を持つようです。形態や生態および DNA 配列や代謝産物などを同時に調べて結論を導く、という研究が多数発表されました。故渡邊真之氏とともにやってきた研究手法や考え方と同じであるということを確認しました。これまで E-mail を通じてしか知らなかった研究者達と実際に会って話し、討議できるということは実に楽しく、有意義なことでした。また、初めて顔を会わせた研究者とも今後連絡を取り合うことを約束し、再会を願って帰途に着きました。大会の準備・運営に尽力下さり、本稿のために写真を送信して下さいました南ボヘミア大学理学部の Jan Kaštovský, Tomáš Hauer 両博士および大学院生の皆さんに感謝します。

Kann, E. & Golubic, S. 1985. 25 years of the International Association for Cyanophyte Reserch. Algological Studies 38/39: 15-32.

(つくば市)



写真撮影：Jana Korelusová